

## 『天蓋のもと』

川越市 小林茂樹

芹沢光治良先生の著作『天蓋のもと』は、昭和十二年六月、雑誌「改造」に発表された短編小説であるが、天蓋という表現のめずらしさと、その意味する基本的な道徳としての普遍性に強い感銘を覚え、その具体的な解説力と価値を仕事上にも活用したいと意識し、貢献と奉仕に繋げたことで思い出が深い。

天蓋とは仏像などの上方にかざしたり、つつたりする絹張りの笠のことであるが、それは単に飾りものというだけのものでなく、深い意味があったことを知らされて、何ごとにも意味があるものだと感慨を覚えたが、芹沢先生の洞察力に、はかり知れないものを感じた。

仏像の上におほひかぶさった天蓋が如何に美しく立派なものにしろ、仏像が鬱陶しくはないかしらと思ひ、そう思う人間心を人の権力欲にたとえて、人間の陥りやすい心得違いを明解に示したことである。

舞台は、セメントを詰める袋の製造販売業を営む小倉商会である。先々代の頃には、小僧を三人使っていた小さい小倉屋であったが、今日では労働者の四百人も収容する工場を経営し、事務所には二十三人をかかえて月に何百万袋という規模で商いをするまでに発展している。登場人物は、先代の未亡人で女主人の常子、そのひとり息子の一郎（勤続数年・二十六歳）、支配人の林田長作（亡くなった先代と同輩・勤続三十五年五十八歳）、販売主任の野村（四十二歳・執筆時の芹沢先生と同年代）、女事務員の花尾つる子（一郎と同年代・勤続五年）の五人である。時代は昭和初期であるが、セメントを詰める容器が木製の樽から麻袋へ、更に紙袋へと進化した流れがあって、その切替えに先進的役割を果たしたのは、もっぱら支配人林田の力であった。紙袋を試みようとして、アメリカからその難しい製袋機を輸入した女主人常子の力量にも感心する。

あらすじは、支配人林田が勤続三十五年を迎えて、そのお祝いに胸像までいただいたので、販売主任の野村も一郎も、そろそろ自分たちに地位を譲ってもらえると思うのだが、一向にその気配をみせないことから軋轢が絶えない。林田の胸中には、野村も一郎も立派にやっつけていける見込みがついていないので、いま辞めるわけにいかないが、野村の方は自分が辞めさえすればおさまる程度の問題だが、一郎については、常子の要望もあってお店の後継者だとして叩き上げる必要があり、独力で店の経営ができるまで助力していかねばと思っている。しかし一郎は林田の真意を理解できるほど成長していないばかりか、お店を私物化しようとする考えだ。ある時、一郎は林田に向かって、支配人はうちの使用人でしょう。主人のような顔をしているが、僕はもう使用人に顎で使われてるのが我慢できないんです。僕はここの主人のつもりですよ、戸主ですからね。この店の主人は自分ですよ、と言って盛んに支配人を牽制する。店を譲りたい一心の林田は、一郎への包容力を保ちな

がらも、お店第一ってことが分からぬ間は、店の経営はできんぞ、主人なのは店だ、店が主人だ、お前もわしも店の奉公人だ。それが肚にしみこむまでは、わしはここに頑張ってるよと諭す。老人にとびかかりたい衝動に全身が軽くなった一郎は金庫の上に載せていた支配人の胸像に八つ当たりの拳を上げ、それがもとで林田は事故死してしまう。常子は支配人の死に疑念をもちながらも、販売主任の野村を新支配人に任命するが、そのことから一郎と女主人常子、そして新支配人野村との摩擦は更に激化する。女事務員花尾つる子の一郎に対する微妙な女心の発露や、一郎自身が己の良心と問答して勝手な結論に導いていく過程は実に具体的で興味深い。一郎は新支配人野村に対しても、自分こそが主人であると主張するが、新支配人の野村も、一郎君、貴方は主人だというのが、よくこの店に聞いて見給へ、主人は店であって、貴方でも私でもない。お店が主人です。この金庫に資金を蓄えた人の魂はこの店にとどまってるんですよと前支配人林田の精神をくずさない。争いを回避するには、女主人常子が己の地位を息子の一郎に譲るか、或いは息子を切るか、いづれかの決断が必要に思われるが、もっともだいじなことは、両支配人が経営の心得として、お店第一。お店が主人、働く者はどんな地位にあってもお店の奉公人、そうした精神が天蓋なのであり、人はみな天蓋のもとで働き、生きているのだということを肚にしみこませることである。

内に在ってはお店（国）が主人、外に向いては顧客（国民）が主人、その理念を保持するは公私を問わず勤労者の義務であり、それを守ることが「天蓋のもと」に在る人間たりえると教える環境づくりは大人の責任である。

金融破綻や事実隠し等の不祥事で大人たちの断罪が目立つ世相であってみれば、誰しもが理念不在の世を嘆き、この国の文化・文明を恥ずかしいと感じるに違いない。そんな環境で健全な子どもたちが育まれるはずがない。

どんなに時代が変化したとて、こころの満足感こそが幸せというものである。この世で全力を尽くして、そして楽観して死んでいきたいと願うならば、基本的な徳育の教本として、ぜひ一読してほしい作品である。